

# 「日本の美術を西欧に紹介したい」 東西文化交流の先覚者

はやし ただまさ  
林 忠正



## 花の都パリへ行きたい

「おお、起立商工社という貿易会社が、フランスの  
パリで開かれる万国博覧会の通訳を募集しているぞ  
これだ！」

東京大学の学生だった林忠正さんは、目の前に、  
急に道が開けたような気持ちになりました。

日本が鎖国をやめ、世界の国々と交流するようにな  
った明治時代、忠正さんは、何とかしてヨーロッ  
パへ行きたいと考えていました。

しかし、その当時、ヨーロッパは簡単に行けると  
ころではなく、なかなかチャンスに恵まれなかつた  
のです。

「新しい時代には、新しい生き方が必要だ。ようし、  
このチャンスを活かしてパリへ行つて、自分の生き  
る道を見つかるぞ」

忠正さんは、大学でフランス語と理学（科学）を

ほう、ヨーロッパの人々にとって  
日本の浮世絵や書画は  
そんなに興味深いものなのか！  
よし、日本の美術や文化を  
もっと広く知ってもらおう。

忠正さんは、ゴッホやルノワールをはじめ、さまざまな画家と交流したんだって。



ヨーロッパの人は、日本の浮世絵をどんな風にかじらのかしら？



林忠正さんは、浮世絵や古美術など日本の伝統的な芸術をヨーロッパに紹介した人です。



林 忠正さんのミニ年表

西暦	年齢	
1853年		高岡町(現在の高岡市)の長崎家に生まれる
1870年	17歳	富山藩士の林太仲の養子となる
1871年	18歳	大学南校(現在の東京大学)に入学する
1878年	25歳	万国博覧会の通訳をするため横浜からパリへ出発する
1884年	31歳	パリで美術店を開く
1886年	33歳	パリから帰国する
1898年	45歳	1900年記念パリ万国博覧会の事務官長になる
1906年	52歳	亡くなる



忠正さんが日本を紹介した雑誌。(パリで発行されたもの)

勉強していたので、フランス語の通訳なら、うつてつけです。忠正さんは、さっそくこの仕事に応募しました。

パリに行けるのなら、大学をやめてもいい。通訳の仕事が臨時の仕事でも、かまわない。とにかく、パリへ行きたい。

こうして、忠正さんはあこがれていた花の都パリへと、旅立ったのです。

美術商こそ、生きる道

フランスに渡った忠正さんは、万国博覧会の通訳の仕事が終わっても、パリの街に残りました。そして、フランスへ来た日本人の通訳や、翻訳などの仕事をし、細々と暮らしていたのです。

そのうち、忠正さんは、起立商工社の若井兼三郎という人に誘われ、日本の美術品を扱う仕事をするようになりました。

忠正さんは、自分が美術品の商売をするようになるとは、考えたこともなかったのですが、若井さんから美術品の知識や仕入れ方などを教わるうちに、夢中になっていきました。

「こんなにももしろい世界があったとは！」

忠正さんは、夢中になれること、つまり自分の生きる道を見つけ出したのです。そのうち、忠正さんは、会社をやめて独立することを考えるようになりました。

今までの経験を活かして、自分にできることを思い切りやってみよう。こうして、忠正さんは、パリに小さな美術品の店



忠正さんと親交があったパリの画家が描いた忠正さんのデッサン。

を開きました。最初は、わずかな輸入品を売る小さな商売でしたが、今までの仕事で知り合ったお客さんが来てくれたおかげで、店をだんだんと大きくすることができました。

また、一緒に退社した若井さんと商売をすることになり、若井さんが日本で仕入れた美術品を、忠正さんがパリで売るというシステムをつくり、更に大きな事業を行うようになったのです。

ジャポニスムの流行

忠正さんがフランスに渡ったちよつどそのころ、ヨーロッパでは、日本の美術品が注目され、熱烈に愛好されるといふ動きがありました。

この流行は「ジャポニスム」と呼ばれ、多くの画家たちに大きな影響を及ぼしました。日本の美術を初めて見た西洋の画家にとつて、特に浮世絵の大胆な構図や、美しい曲線、明るい色彩は、衝撃的だったのです。

忠正さんにとつても、この「ジャポニスム」の流行は、大きな驚きでした。



ゴッホの作品「タンギー爺さん」の背景には、日本の浮世絵が描かれています。世界的な画家であるゴッホも、浮世絵から大きな影響を受けていたのです。



1880年ごろの日本は「文明開化」の時代で、西洋諸国に追いつこうと一生懸命で、自分の国の良さを積極的に認めようとする人が少なかったからです。

ああ、日本の美術の良さを分かってくれる人がこんなにいる。自分も、しっかりと美術を研究して、正しいことを伝えなければ。

忠正さんは、日本の美術に関する知識を学び直す一方で、当時パリで活躍していたモネ、ドガ、ルノワールといった、世界的に有名な画家たちと親しくつきあいました。

そして、彼らが望む安藤広重や葛飾北斎などの浮世絵を、数多く日本から取り寄せて紹介したのです。

また、日本美術を研究していたエドモンド・ゴンクールさんから協力を頼まれ、浮世絵の説明などに、全面的に協力しました。

実は、ゴンクールさんは、日本の美術を詳しく研究するために、日本へ行きたいと願っていましたが高齢のために果たすことができず、困っていたのでした。

忠正さんは、浮世絵に描かれているものや使い方などを、ていねいに説明しました。ゴンクールさんは、忠正さんの説明をもとに、『北斎伝』や『歌麿伝』という本を書きあげ、浮世絵を広く普及させました。このように、忠正さんは「ジャポニスム」の流行

の中で、浮世絵などの日本美術の芸術的な評価を高めることに、深く関わったのです。

## 西洋の技法を日本の美術界へ

忠正さんは、ヨーロッパに日本の美術を広めることに関わっただけでなく、逆に西洋の美術も日本に紹介しました。

日本の画家の中で最も有名な画家の一人で、近代洋画の父」といわれた黒田清輝さんの才能を見出し、さまざまな支援をしたのも、忠正さんでした。

また、印象派と呼ばれるグループをはじめ、さまざまなすぐれた洋画を日本に紹介し、西洋画の本格的な展覧会を開催しました。

「日本の絵画教育にも、西洋の画法を取り入れるべきだ」と訴える運動をしたこともありました。

このように、忠正さんは、

一生を通じて、日本とヨーロッパを、美術を通して東洋と西洋の文化を結びという大きな仕事を成し遂げたのです。



学校にある日本画などを鑑賞する高岡市立平米小学校5年生のお友達。



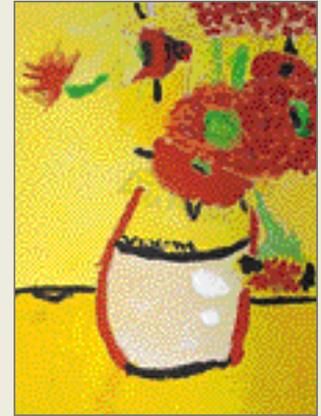
**忠正さんのエピソード** : 忠正さんは、画家だけでなく、「日本美術」を書いたルイ・ゴンスや、ケクラン、ピュルティエなど、日本文化に興味をもつ小説家や文学者とも親しくつきあっていました。



古野桃子さん



小泉慎之介さん



村中謙太さん

## 子ども作品ギャラリー

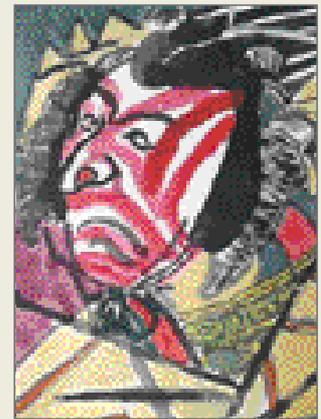
高岡市立平米小学校5年生のお友達が、ゴッホの「ひまわり」や「ランゲロワのはね橋」、「浮世絵」などをお手本にして、習作を描いてくれました。



中野智文さん



大坪記子さん

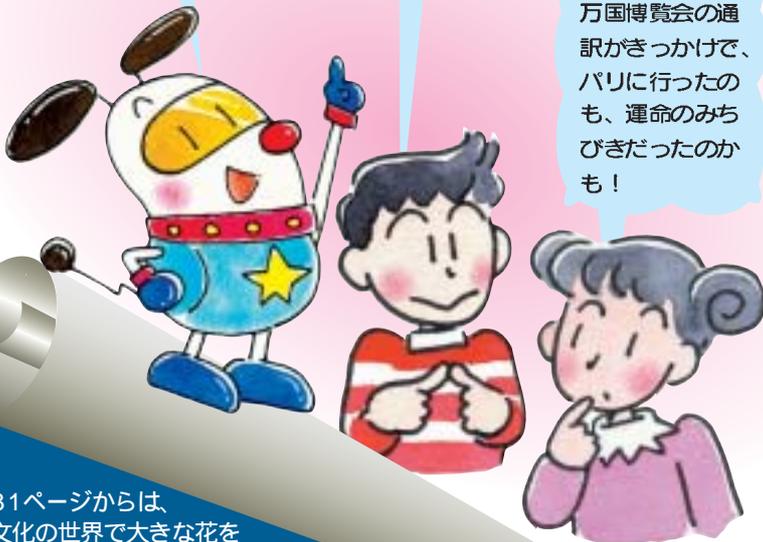


菅池隆太さん

忠正さんは、数十万点もの浮世絵や日本の古美術品を、ヨーロッパに紹介したんだよ。

有名なゴッホという画家も、浮世絵の影響を受けたんだよね。

万国博覧会の通訳がきっかけで、パリに行ったのも、運命のみちびきだったのかも！



31ページからは、文化の世界で大きな花を咲かせた先輩たちを紹介します。まずは、みんなの大好きなまんが家藤子・F・不二雄さんのお話です。



高岡市立平米小学校5年生のお友達(南誠寛さん、酒井祐介さん、柴野健人さん、村中謙太さん、満久智英さん、菅池隆太さん)が、浮世絵について調べてくれました。